文　化　財　学　習　会

ふ　る　さ　と　探　訪

テーマ　ガソリンカー廃線跡　遺構を尋ねる③

（橋梁の橋台跡～鮎滝駅跡）

日　時　　令和５年９月２７日（水）

講　師　　村山　淳（一般社団法人トピカ　代表理事）

共　催　　高松市文化財保護協会・高松市教育委員会

資　料　　塩江町歴史資料館　提供

ガソリンカー廃線跡　遺構を訪ねる【第3回】

橋梁の橋台跡（香川総合センター前）⇩鮎滝駅跡（約3.42km）

明治末期に宇高航路が開設されて、四国の玄関高松に人が集まるようになると、高松と門前町琴平を短絡する鉄道建設の機運が高まり、県内の有力者大西虎之介や、景山甚右衛門らが中心となって同区間に四国初の本格的高速電車として瓦町～琴平間を昭和二年（一九二七）全線開通した。

翌年、琴平電鉄は阿讃国境と塩江温泉郷開発のアクセスのため、昭和三年（一九二八）八月二十一日に塩江温泉鉄道（株）を設立し鉄道の敷設を開始した。着工後昭和四年（一九二九）十一月十二日に仏生山～塩江間（十六．一キロメートル）を開業した。社長は琴平電鉄の社長である大西虎之介が兼務した。この鉄道は非電化の鉄道では唯一広軌を採用した内燃鉄道であった。琴平電鉄が広軌であったため、琴平電鉄からの貸車直通を念頭においてであったが直通運転は実現されなかった。開業に合わせて新造された車両五輌は川崎車輌が手がけた初のガソリンカーであった。以後廃線までこの五輌のみで営業された。

塩江温泉では、琴平電鉄が塩江温泉（株）を設立し、演芸場付きの温泉旅館を経営した。専属の少女歌劇団を養成して「四国の宝塚」として売り出し、定期的に催物を企画して運賃割引を行うなど積極的に営業活動を行なった。しかし当時の経済不況もあり経営は苦しく塩江温泉鉄道は昭和十三年（一九三八）七月六日付けで琴平電鉄に吸収合併され、琴平電鉄塩江線となった。

しかし、琴平電鉄に吸収された後も営業好転の目途がたたず、燃料であるガソリンの統制が厳しくなるなど営業がますます困難となり、塩江線は開業からわずか十二年後の昭和十六年（一九四一）五月十日に廃止された。廃止後、レール等の鉄道施設は台湾製糖株式会社に売却された。車両は満州に渡り、新京（現在の長春）市電となった。

ガソリンカーは昭和三年（一九二八）川崎車輌製の半鋼製片ボギー式ガソリンカーで、自重六．五トン、定員四十名、米国アンドリュース・アンド・ジョージ社製三十八馬力ガソリン機関を搭載、長さ八メートル強、幅二．五メートル強、片側二ドア。ガソリンカーとしては前進・後進のできる最初の車両であったという。総工費は七十五万円。延長十哩一分（じゅうまいるいちぶ＝16.093443 キロメートル）である。

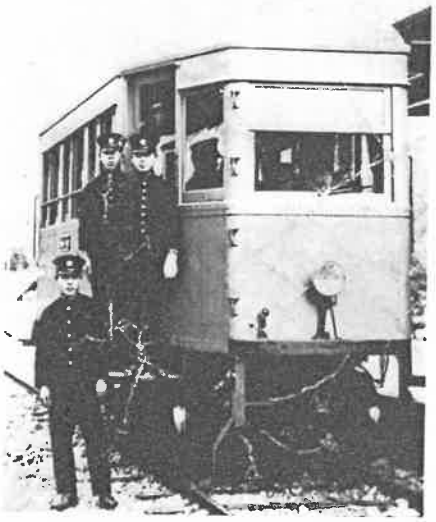
鉄道賃金は、区間制度にして一区五銭。仏生山～塩江間を十区に分けられてあるが、二区以上は一区四銭の割合で、仏生山～塩江までは四十銭であった。

廃止後八十年となる現在でも、各地に遺構が残っている。琴電仏生山駅から香川町浅野にかけては市道となっており当時の面影はないが、ガソリンカーであったため路線が「ガソリン道」として親しまれている。香川町浅野から塩江町安原下までは、香東川自転車道となっており、トンネルや橋脚などの遺構が残っている。

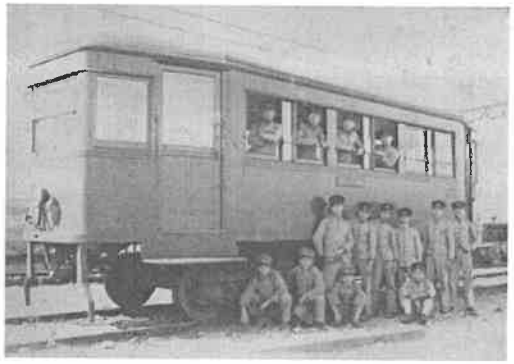
路線営業距離は十六・一キロメートル。駅数は、仏生山・船岡・浅野・伽羅土・川東・岩崎・鮎滝・関・安原・中村・岩部・塩江の十二駅であった。開業直後の一九三〇年の時刻表は、仏生山発午前五：十四～午後九：五十四、塩江発午前六：〇四～午後一〇：四十四で、一日二十一往復、五十分ごとに運転されていたが、その後二十五分ごとにし、ことでん全電車に接続もされたがあまりサービスの効果もなく、合併後再び五十分ごとに変更された。一九三〇年度が最高の輸送実績でその後は年々低下していった。一九三〇年当時の全線所要時間四十二分、運賃四十銭、ガソリンカーでほとんど一輌での運転であった。

塩江温泉鉄道の乗組員とガソリンカー

昭和５年　塩江駅での運転手・車掌とガソリンカー



通学の学生たち



第四香東川橋梁　鉄橋を走るガソリンカー

鉄道建設に伴って沿線開発と旅客誘致のため、昭和三年十一月二十六日に塩江温泉(株)が設立され、旅館「花屋」直営の「温泉館」が花屋の東隣に開業した。塩江温泉鉄道の開通と同じ日に開業した。

この建物は二階建てで、一階に浴室・休憩室・売店・遊戯場・理髪室などがあり、二階には演芸場が造られ、専属の少女歌劇が年中無休で数年間開演された。「四国の宝塚」として人気を集めていた。

その後、昭和十五年少女歌劇は消え、昭和十八年花屋は一旦幕を閉じた。同年八月二日、県の管轄となった花屋は「健民修練所」として体質の弱い青年を集め修練が行われていた。昭和二十一年花屋旅館を復活し塩江温泉の伝統を活かして観光による塩江の発展を図り観光客は次第に多くなった。その後温泉館は、昭和二十五年頃取り壊される。そして、昭和四十九年、花屋は休業中の失火によって焼失し、一世を風靡した旅館「花屋」はここに完全に幕を閉じた。

ガソリンカーは、通称「ガソリン」と呼ばれ、またマッチ箱ともいわれ、ガッタタンガッタタンと豪快な音を響かせて走っていたという。一車輌の定員は四十人乗りだが、菊人形などが行われる観光シーズンには一〇〇人近く乗ることもあった。学生定期は五割引きでいずれも六ヶ月定期として発行していた。主に、朝は高中(現高松高校)や高商、香川高校(現高松南高校)に通う学生たちで満席だった。一車線のため、上りと下りの交替する場所が必要であり、鮎滝で行っていた。四輌を使用するときには、運行回数が多いので浅野や中村でも交替をしていた。普通四人が運転業務にあたっていて、三往復運転すれば一往復分休憩するというようになっていた。運転台は車輌の前後にあった。エンジンの調子が悪く、日によっては二～三回発車の時にエンジンがかからないということもあった。そんなときには、お客に頼んで数人で押してもらったりした。また上り坂の時にはいったん下り坂の方へ押してエンジンをかけ、再び上り坂の方へ進行したりもした。ワイパーも手動で、雨の日には片手で操縦しながら同時にワイパーも動かしていた。

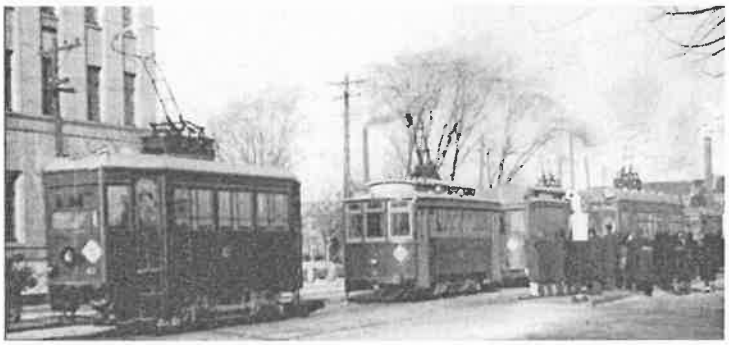
レール等の鉄道施設は台湾製糖株式会社に売却された。車輌のガソリンカーは満州に渡り、一部改造され新京(現在の長春)の市電として使用された。

新京を走る市街電車(　昭和十八年一月)

塩江温泉鉄道のガソリンカーは左端の 41 号車。その右は、もと大阪市電。

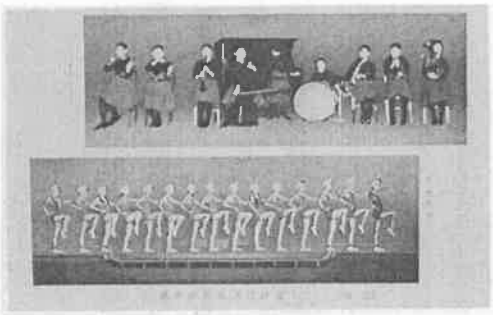
三両目以降右端までは大連から譲り受けた電車。

鉄道ファン　昭和六十一年(1986)七月号より



料理旅館　花屋

花屋専属の少女歌劇と少女ジャズバンド



昭和 10 年頃　塩江駅とハイヤー(フォード型)

ハイヤー料金は、塩江地区内～三十銭均一。「虹の滝」往復は、待ち時間込み二円であった。

写真中央の建物が「塩江駅」

◆参考資料①

昭和五年七月一日～十二月三十一日　半期営業報告書　運輸成績表

営業日数　一八四日

走行距離　一〇四四三五里八分（約四一七七四三キロメートル）

乗客人員　一五八八七六人　一ヶ月～約二六四七九人

一日平均～八六四人

◆参考資料②

昭和十一年当時は、米一俵が十一円八十銭。うどん一杯・油揚げ五枚が五銭。

ほかに三越の「うな重」は五十銭していたという。

☆ガソリンカー復元プロジェクトについて

二〇十八年度に塩江町地域おこし協力隊員と若い人たちが中心となって、興味ある人は誰でも参加できるという「ガソリンカー復元プロジェクト」がスタートした。

当初香川高等専門学校の学生有志五人が参加し、ガソリンカーの模型を作成する「模型班」と、廃線跡の遺構を散策するためのガイドマップを作成する「マップ班」に分かれて行動を開始した。

模型班は二〇十八年度中に「ガソリンカーの模型の作成」をする目標だったが、ガソリンカーの図面がない。廃線後七十七年も経た現在まで図面の存在は知っている者がいなかった。調査の結果、埼玉県の鉄道博物館に設計図らしきものがあるということがわかった。早速、高専生が現地に飛び写真撮影をし、当時のガソリンカー製造元である川崎重工に問い合わせ、正式な発見となる。

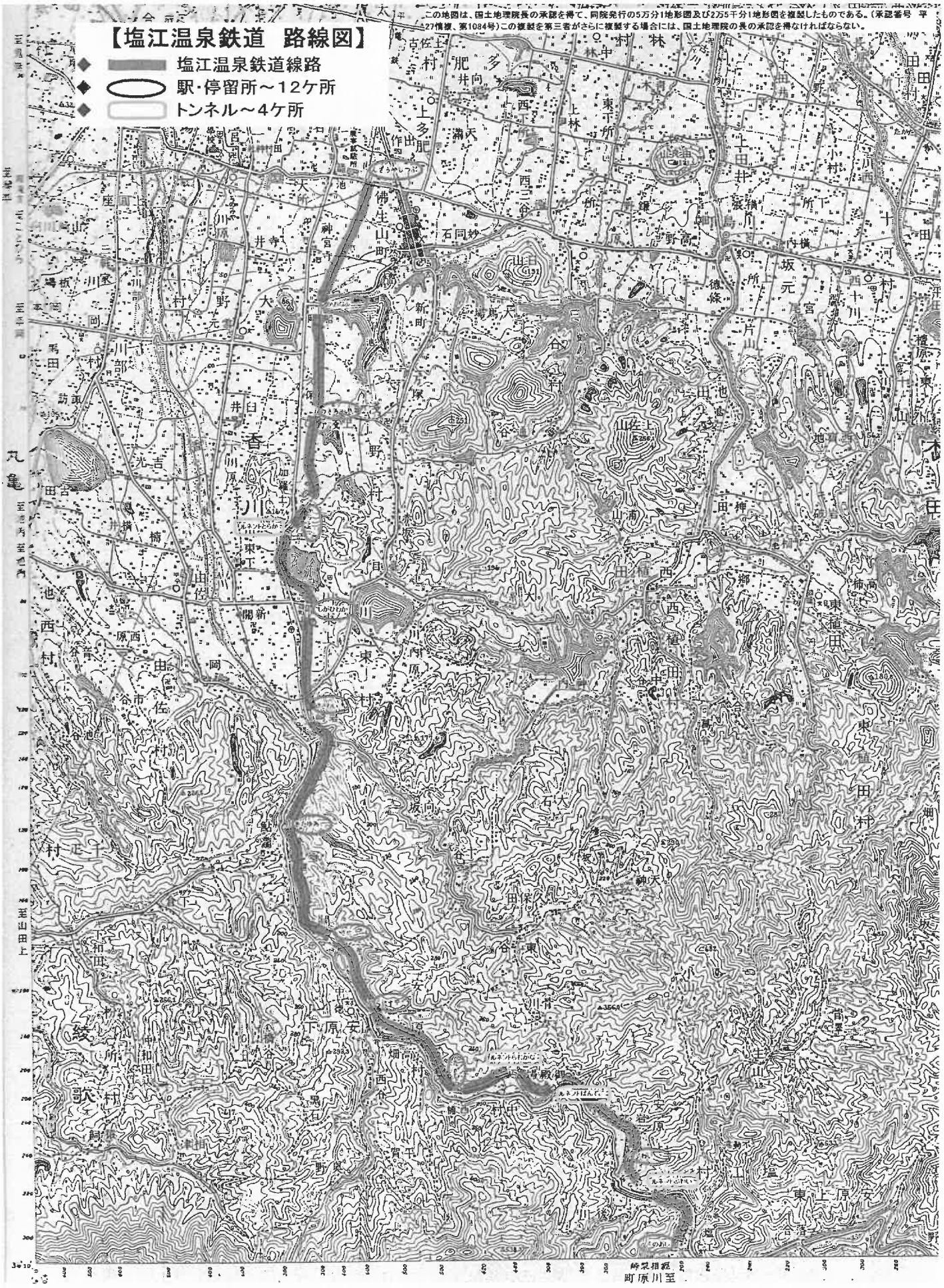
まずは、香川大学の先生方に協力を依頼し3Dモデルを完成させた。さらに、当時の図面を元に香川大学創造工学部の学生たちによって新たに復元図面が作成された。また、マップ班は日本語版と英語版の二種類のガイドマップを作成し無料配布している。

そして、二〇十九年度には、木製の骨組みで原寸大アート作品を完成させ八月に塩江美術館の企画展で展示された。ガソリンカーの窓には塩江中学生が塩江町の風景を描いた「ちぎり絵」の作品を描いた。

二〇二一年度には塩江温泉鉄道の「1/80サイズのジオラマ」を完成させた。ガソリンカー実物大の車内部分の一部を製作し、つり革も取り付けた。

今後は実物大車両模型の恒常展示できる設置場所を探し公開することを検討している。

昭和8年12月28日発行　塩江温泉鉄道　路線図



◆近隣の見どころ◆

☆龍満池

香川町川東下にある龍満池は、寛永三年(一六二六)四月から七月中旬までの間大干ばつが起き、稲の収穫は皆無となり餓死する者が多数出たことから翌年、寛永四年(一六二七)に西嶋八兵衛により築造された。

雨が少なく水持ちの悪い土地柄だったが、この地には、池が築かれる以前に梅ヶ井出水という小さな出水があり、今も池底で湧き水があると言われている。ここに、香東川に設けた世中井堰から取水した水を溜め、大野・川東の農地に水を送っていた。しかし、龍満池を築造してもなお水不足に見舞われることも多かったことから、地域独自の水利慣行のもと、貴重な水を一滴も無駄にせず、公平に分けるために行われた香水の記録が数多く残っている。また、昔からたくさんの呼び名があり、龍満池の他にも、大野池、北田井池、立満池など様々だったが、江戸末期の庄屋の名前(龍満権之守)から、その後は龍満池の呼び名が定着したようだ。 龍満池の中には、明治初年(一八六八)に設けられた川東八幡神社の御旅所が、幅十メートル、長さ百五十メートル余りにわたって真っすぐに延びている。一時は、讃岐競馬クラブが経営する競馬の練習場にもなっていたが、昭和八年には、嵩上とともに沿道に桜が植えられ、池に浮かぶ桜の路は、春の訪れを告げる風物詩となっている。さらに、近年は堰堤への桜の植樹や東屋等の環境整備も進み、地域の内外から花見客が訪れる「竜桜公園」として多くの人に親しまれている。

☆ひょうげ祭り

本来は、香川町浅野の高塚山に鎮座する新池神社(池宮さん)の祭礼のことだが、一般的には、そのうちの神輿渡御行列のこととして定着している。

この祭りは、土地の高低がはなはだしく水不足に悩まされていた浅野地区に水を引くため新池を作った矢延平六の徳を偲ぶとともに、水の恵みに感謝し、豊作を祝う行事として始められた。

祭りは、浅野地区集落研修センターから新池までの約二キロメートルをひょうげながらねり歩く神幸が見ものである。ひょうげるとは、おどけるとか滑稽という意味で、ひょうげ祭りという呼び名もここからつけられた。

神輿の渡御に使われる神具はすべて農作物や家庭用品などを中心に整えられている。供侍となる人々は飼料袋の裃にしゅろ皮で作ったまげやくだものかごに紙を貼って墨汁を塗ったものを着け、足には白足袋、わら草履を履く。そして腰には里芋の茎にかぼちゃの鍔をつけた太刀を格好よく差し、色鮮やかな顔作りをしている。

ひょうげ祭り保存会の手によって、毎年九月の第二日曜日に実施されており、県内外から大勢の見物人が訪れている。

☆油山の伝説

竜満池の北側のなだらかな山が油山である。この山の岩間からはちょろちょろと油が湧きでており、近くの人たちはそれを汲んでは夜の灯りにしていた。ところがある欲深い人がいて大きい鍋に何日分かの油を一度に汲んで、それをやぶにかくしておいた。これを知った人々はわれもわれもとたくさんの油を汲むようになった。そんなことがあってから、ついに油は一滴も出なくなったという。

この油山周辺からは弥生式土器破片や古墳時代の石室が発見されている。今では、果樹園住宅地となっているが、なお青松とツツジの美しさが楽しめる。(案内板より)